

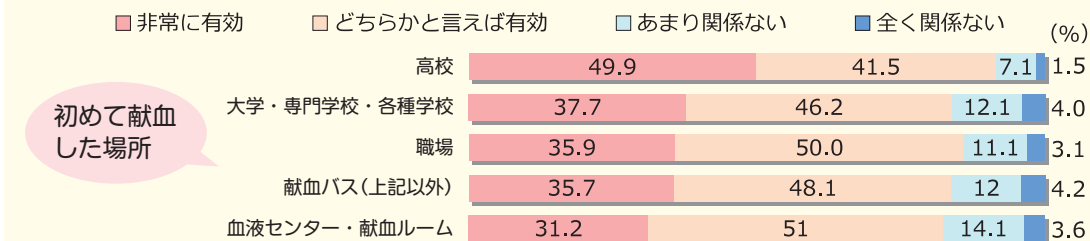
高校生に対する献血推進が重要です。

① 少子高齢社会では、血液製剤の需要が増大するとともに、献血可能人口は減少します。血液製剤は医療に無くてはならないものですので、血液が足りなくなると患者さんに届けられない、という事態はどうしても避けなければなりません。

そのため、これからの社会を支える若年層の献血者をいかに増やすかが喫緊の課題となっています。

② 厚生労働省が献血経験者を対象に実施した調査では、多くの人（特に、初回献血が高校だった人）が「高校での献血がその後の献血への動機付けに有効」と考えていることがわかりました（下図参照）。

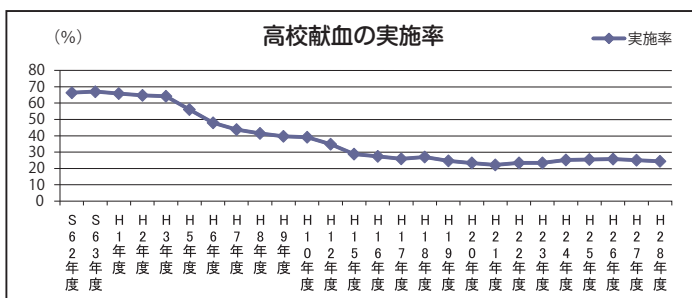
Q. 高校での集団献血が、その後の献血への動機付けとなるか



少しでも献血に触れ合っていたらいいように・・・

献血バスが出向いて実施された高校献血は昔、実施率が約6割ととても盛んに行われておりましたが、徐々に減少し続け、現在では2割程度にまで落ち込んでいます。

この高校献血の減少によって、学生たちは献血に触れ合う機会自体が減ってきています。



献血については、平成21年7月に改訂された「高等学校学習指導要領解説／保健体育編」に「献血の制度があることについても適宜触れる」ことが追記され、平成25年度から高等学校の授業で触れられる環境が整いました。

献血受入を行っている日本赤十字社では、献血のきっかけづくりや、将来にわたって献血にご協力いただくための取組として、学校に出向いての「献血セミナー」（スライド・映像やパンフレットを用いた学習講座）を積極的に実施しております。

詳しくは、最寄りの血液センターへお問い合わせください。